

<ラウンドテーブル報告1>

留学生のための支援活動

【企画者】 平川彩子(久留米大学)

【司会者】 池田富見子(久留米大学)

【報告者】 平川彩子(久留米大学)

権藤早千葉(久留米大学)

池田富見子(久留米大学)

中山亜紀子(佐賀大学)

1. 企画の趣旨

独立行政法人日本学生支援機構の調査によると、2010年5月1日現在、日本の高等教育機関で学ぶ留学生は14万人を超えている。日本政府は留学生30万人計画を策定しており、2020年を目途に留学生の受け入れ30万人を目指している。

このような現状において、現在、佐賀大学では留学生が約300人(内2割が学部生)、久留米大学では約250人(内7割が学部生)となっている。大学における初年次教育を考える上で、留学生の存在を念頭に置くことは必須事項であり、国際化を図る大学および地域にとって、留学生の存在は、ますます重要性を増していくだろう。

本ラウンドテーブルでは、久留米大学における留学生のための支援活動の取り組み「留学生支援タイム」(以下、支援タイム)および久留米大学留学生別科の学生への支援体制を紹介した。また、佐賀大学における留学生向けの初年次教育の取り組みを紹介し、これまでの具体的な事例を交え、意見交換をしながら、より良い留学生支援の在り方について議論した。

2. 久留米大学の留学生支援タイム

久留米大学では、留学生の勉学環境への適応を図るため、日本語の学習面や生活面に関する支援を2001年度から実施している。支援タイムは週に3回(1回90分)行い、日本語教[テキストを入力]

師とチューターが留学生の相談に応じている。チューターは日本人と留学生の大学院生が中心で、日本語と母語(主に中国語)での相談にも対応している。

(1) 久留米大学留学生別科

久留米大学留学生別科は1999年4月に開設された。留学生別科とは、大学または大学院に留学生、研究生として入学する人のため、準備教育として、日本語および日本事情など必要な科目を教育することを目的とした教育機関である。久留米大学留学生別科には1年コースと1年半コースがある。2011年5月1日現在、留学生別科の在籍者数は30人である。

(2) 留学生支援タイムの利用状況

支援タイムは、久留米大学に所属する全ての留学生が事前の予約や登録をすることなく、無料で利用できる。2009年度は80回実施し、延べ利用人数は490人であった(平川, 2011)。特に、来日直後の別科生の利用が多いが、学部1年生や交換留学生の利用も見られる。また、利用者が支援を受けられるという一方向の利点だけではなく、支援者側のチューターも、この活動を通じ、非常に大きな充実感が得られている。支援タイムは学内での国際交流や留学生同士の交流の場として重要な役割を担っている。

(3) 留学生支援タイムの今後の課題

別科生以外の200人以上の留学生に支援タイムをどのように周知し、利用を促していく

のかが第一の課題である。また、チューター
の人数を確保することも課題の一つである。
そのため、2011年度からはチューターに加え、
ボランティアとしてサポーターも支援に
関わっている。支援タイムの開催時間、
教室の確保など、支援側の運営体制を
どのように改善していけば良いのか
についても、検討を重ねていく
必要がある。

留学生に対するこれまでの支援活動の
経験を交え、支援タイムの現在の
問題点を提示し、今後の支援体制
の在り方について検討した。

3. 佐賀大学

佐賀大学の第2外国語としての日本語
クラスは毎週2コマずつ3レベル開講
されている。受講生は、学部留学生
と協定校からの短期留学生である。
また、前期には読解と発表、後期
には作文を中心としたカリキュラム
が組まれているが、どのレベルでも
単一のアカデミック・スキルに特
化した授業ではなく、総合的な日
本語力育成を目指しているという
特徴がある。

(1) 学部留学生が必要とする支援

学部留学生が大学生活を円満に送る
ためには、レポート作成やゼミ発表
を行うためのアカデミック・スキル、
批判的思考力や自己表現力が必要
だと言われる(門倉, 2003)。しか
し、筆者の実感では、スキル教育
がコピーではなく他人との意見の
違いを認め、自説を展開することに
必ずしも結びつくとは限らないと
感じる。また、一般の授業を受ける
ための「日本語力」養成の必要も
感じる。

さらに、多くの学部留学生は、大
学入学のための受験勉強から解放
されたばかりで、1年次には目標
を失っていたり、専門と自分の適
性に悩んだり、大学生活について
悩んでいる学生も少なくない。

本発表では、2010年と2011年
の前期に行った筆者の実践(日本
語 I b)を発表することで、日
本語の授業でできることを検討
した。

(2) 日本語 I b

日本語 I b では、「大学生活」を
メインテーマに、前半は各界の著
名人が自分の大学生活を綴った
ジュニア新書 15 ページ程度の
エッセー読解、後半は自分の身
近な人の大学生活を調べるイン
タビューと発表でシラバスを構
成している。このほか、2011
年は毎週 45 分を使って、日
本人学部学生とのチュートリアル
・セッションも行った。

このようなテーマを掲げたのは、
受講生、特に学部留学生が、他
者の大学生活を知ることによっ
て、自分自身を振り返り、今後
の見通しを持つきっかけになれば
と考えたからだ。読解材料を決
めるにあたっては、内容の面白
さ、わかりやすさの他に、1) 漢
字や語彙、接続詞の使い方など
日本語の基礎力を上げ、2) ある
程度の長さのある読み物で全体
として述べているメッセージをつ
かむのに適切である点を考慮し
た。またインタビューでは、3) 読
み物で知った人物や自分の大
学生活との違いを考え、4) その
周辺活動(インタビューを依頼
する、インタビューを文字化す
る)で、日本語力を上げ、5) 発
表スキルを養成するという狙い
があった。

教室活動では、グループ活動を
多く用いて、話し合いを重視し
た活動を行った。

その結果、言葉の教えあい、内
容の確認にとどまらず、自分に
引き付けてプライベートなこと
(大学進学にまつわる話や自分
の進路についての悩みなど)を
話している様子が伺えた。

(3) 今後の課題

相手の話を聞きだしたり、相手
の反応をみながら説明したりと、
話し合いが上手な学生もいる一
方で、話し合いそのものに拒否
反応を示したり、話し合うこと
が苦手な学生が見られた。授
業の中で、話し合いスキルその
ものへ言及する必要がある。

また、各留学生の話し合いス
キルを事前に

調査することができず、グループ分けには使えなかった。面接で日本語レベルが分かっても、グループの中でどのような役割を果たしてくれるのかは未知数だ。会ったことのない学生たちと、どのように機能するグループを作るのか、工夫する必要がある。

読解では、自分の体験や自文化での就職活動に引き付けすぎて、作者の意図を読み違っているグループが2年連続してあった。話し合いへの介入の仕方や授業の組み立てを詳細に分析し、改善する必要があると思われる。

学生が行ったインタビューの録音を聞くと、事前に準備した質問に答えてもらうのが精一杯で、話を膨らますことは十分ではなかった。これには、インタビュースキルのための時間を十分に確保できなかったため、聞き取りが十分にできなかったためという理由が考えられる。

4. まとめ

留学生のための支援活動の取組みとして、久留米大学および佐賀大学での実践例を紹介後、ラウンドテーブル参加者数名から各校での支援活動について発表があった。チューターの確保や支援される留学生をどのようにプログラムに取り込んでいくかが共通の課題であった。支援側としては、大きくは大学全体からのサポート体制も必要である。また、支援を受ける留学生が実際にどのような支援を期待しているのかについて、ニーズを把握しなければならない。そのニーズに応え、留学生に受け入れられやすい形で支援活動を提供できるようにする工夫が必要であろう。

参考文献

- 平川彩子 (2011) 「留学生支援タイム活動報告(2009年度後期～2010年度前期)」『久留米大学外国語教育研究所紀要』18, 193-197.
門倉正美 (2003) 『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』(2002年度～2004年